

## 両側の歯の処置で

### 決まるブリッジ！

歯が数本抜けたときに補う入れ歯には、固定式の「ブリッジ」と、とりはずしのきく「局部床義歯」があります。どちらを選ぶかは、欠損部の周囲の歯の状態、欠損した歯の位置、欠損歯の数などによって決められますが、入れ歯の機能からみれば、ブリッジのほうがまさっているといえます。ブリッジの第一の特長は、安定性がよいことです。第二の特長は、歯ごたえが失われないことです。

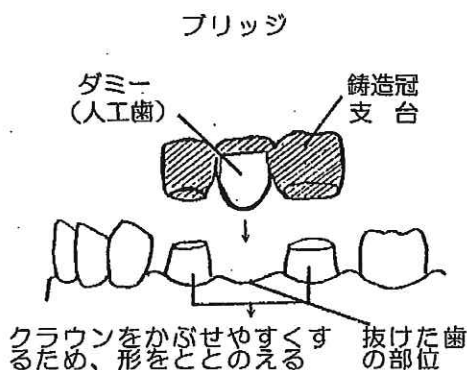


ブリッジとは、抜けた歯の両側の歯にクラウンをかぶせ、人工歯（ダミー）と連結させた入れ歯のことをいいます。抜けた歯が1本のときは、クラウン2本と人工歯1本、計3本を連結した状態で、最初から铸造します。したがって、出来上がったブリッジは3本一組で、外見からは人工歯とクラウンの区別はつきません。これを両側の歯にかぶせて接着したのが固定式の入歯ブリッジです。こうすれば、咀嚼によってはずれる心配もなく、自分の歯と同じように食べ物を噛むことができます。

ブリッジを作るためには、両側の歯にクラウンをかぶせなければなりません。そのためには、両側の歯を象牙質まで削り、クラウンをかぶせやすい形に整える必要があります。もともとクラウンをかぶせてあったり、虫歯のせいでクラウンをかぶせなければならない歯だと問題はありませんが、健康な歯の場合は、人工歯1本のためにわざわざ2本も犠牲にすることになります。クラウンをかぶせた歯はどうしてもプラーク（歯垢）がたまりやすいので、当然、虫歯や歯槽濃漏におかされる危険も出てきます。また、よいブリッジを作るためには、いくつかの条件があります。一番重要なのは、それを支える両側の歯がしっかりしていることです。

支えの歯次第で、ブリッジの性能は決まるといえます。虫歯や歯槽濃漏におかされている歯は、しっかりと治療すること、そして歯の基礎（歯根部、歯周組織）が頑丈であることが何よりも大切です。歯槽濃漏におかされている歯を支えの歯にしてしまえば、ブリッジの性能が低下するのみならず、人工歯に加わる力を歯周組織が背負い込んでしまい、歯槽濃漏まで悪化させます。

ブリッジはそれを支える両側の歯の処置いかんで良し悪しが決まります。



### \*\*\*お知らせ\*\*\*

亜鉛は傷を早く治す役割をもっているほか、子供の成長を促進する役割をもっています。亜鉛は、かきなどの魚介類、小麦胚芽、肉類に含まれています。

亜鉛はコレステロールを減少する働きもあります。